様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０９４４

研究課題名（和文）現代アートを用いての先史文化理解と先史文化を用いての現代アート制作の人類学的研究

研究課題名（英文）An Anthropological Study of the Understanding of Prehistoric Cultures through Contemporary Art and the Making of Contemporary Artworks Inspired by Prehistoric Cultures

研究代表者
古谷　嘉章（FURUYA, YOSHIAKI）

九州大学・比較社会文化研究院・教授

研究者番号：５０１８３９３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：近年、現代アート制作と先史文化研究の間に、「境界横断的」な新種の相互作用が生じ始めている。第一に、現代アート（作品および制作プロセス）を参照して先史文化を理解する考古学の試みであり、第二に、先史文化を用いての現代アート制作である。本研究は、縄文遺跡が存在する国内５地域および比較のための海外２地域において、(A)先史文化と現代アートを同時に視野に入れた展覧会、(B)組織者の見解、(C)参加したアーティストの活動等を対象に文化人類学的実態調査を行い、その結果、先史文化が現代社会にとってもつ意味を模索する考古学的試みにおいて、現代アートが可能性のあるパートナーとして現れつつある状況が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In recent years, new types of "transgressive" interaction have been emerging between the production of contemporary artwork and the research on prehistoric cultures. First, some archaeologists endeavor to interpret prehistoric cultures, referring to the contemporary artworks and their production processes. Secondly, contemporary artists produce their works, inspired by prehistoric cultures. The present study consists of anthropological fieldworks, in five regions in Japan that contain archaeological sites from the Jomon period and two overseas regions (for comparison), on (A)the exhibitions held in museums/galleries that display prehistoric artifacts and contemporary artworks at the same venue, (B)their organizers and curators' intentions, and (C) the participant artists' motives. As a result, it has become evident that contemporary art/artworks/artists are emerging as prospective partners for the archaeological endeavor to explore the meaning of prehistoric cultures for today's world.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学　先史文化　現代アート　縄文文化　アマゾン先史文化　博物館展示　遺跡保存　世界遺産

１．研究開始当初の背景

先史文化とアート（芸術・美術）の間には、従来から、特定の先史遺物にアートとしての芸術的価値を見出す、あるいは、アートの発生についての人類史的研究に貢献する資料的価値を特定の先史遺物（例えば洞窟絵画）に見出すなどの試みはなされてきたが、多くの場合、美学・美術史学あるいは考古学それぞれの学問内での展開にとどまり、「相互不可侵」的な分業体制ができあがっていた。ところが近年、現代アートの制作・展示と先史文化の考古学的調査研究・展示の間に、これまで見られなかったような、新しいさまざまなかたちの「相互乗入れ的・境界横断的」な相互作用が現れつつあり、それらは「現代社会における先史文化の意味」と「先史文化にとっての現代アートの意味」、「現代アートにとっての先史文化の意味」という、刺激的な文化人類学的問題群を構成している。

２．研究の目的

本研究は、国内外で進行中の、先史文化の研究と現代アート制作の間の新種の相互作用の深まり、具体的には、「現代アートを用いての先史文化理解」（先史文化を理解するにあたって現代アートの作品および制作プロセスを参照する認知考古学などの試み）と「先史文化を用いての現代アート制作」（先史文化・遺跡・遺物などを作品に組み込む、それにインスピレーションを得て作品を制作する、先史考古学の発掘や展示などを作品化する、等）が、具体的事例において、どのように連動し、どのような効果を生み出しているのか文化人類学的実態調査によって詳細に明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

(1)【研究方法の概要】「現代アートを用いての先史文化理解」と「先史文化を用いての現代アート制作」が連動しつつ展開している現在進行中の状況を明らかにするための方法として、文献研究やインターネット等による情報収集も援用するが、基本的には、文化人類学的実態調査が採用された。調査対象は大きく 3 種類に分けられる。①先史時代の遺跡・遺物の保存・研究・展示を行う施設（博物館等）および関連施設（美術館等）の活動、特に、先史文化と現代アートを同時にテーマとして含む展覧会を開催した実績のある博物館や美術館の展示普及活動等、②先史遺跡等の保存や活用をめぐる自治体や地域社会の取組み、②現代アート制作プロセスにおける先史文化の「利用」の実態。

(2)【定点観測的国内調査】「船橋市飛ノ台史跡公園博物館」（千葉県船橋市）において 2001 年から毎夏継続的に開催されてきた、縄文文化専門博物館を会場とする現代アートの展覧会である「縄文コンテンポラリー（アート）」展を対象として、4 年間にわたり企画・運営に協力しつつ定点観測を行い、継続性と変遷を明らかにした。

(3)【国内各地の先史考古博物館および美術館における展示や活動を対象とする実態調査】調査対象とした地域・施設・行事等は以下のものである（実施順）。①東京国立博物館における「うつす・つくる・のこす：日本近代における考古資料の記録」展、②新潟県十日町市（十日町市博物館）、津南町（農と縄文の体験学習館なじょもん、歴史民俗資料館）、長岡市（新潟県立博物館、馬高縄文館）、③長野県茅野市（尖石縄文考古館、茅野市市民館）、④青森市（三内丸山遺跡・縄文時遊館、青森県立郷土館、青森市森林博物館、小牧野遺跡）、⑤岩手県滝沢市（滝沢市埋蔵文化財センター）、一戸町（御所野縄文博物館）、盛岡市（縄文の学び館、岩手県立博物館）、⑥八戸市（是川縄文館）、⑦函館市（函館市縄文文化交流センター、

函館市北方民族資料館)、北秋田市(伊勢堂岱縄文館)、鹿角市(大湯ストーンサークル館)、⑧「北海道・北東北縄文遺跡群世界遺産登録推進国際フォーラム」(東京)、⑨「火焔型土器のデザインと機能 Jomonesque Japan 2016」展(東京)、⑩山形市(山形県立博物館、東北芸術工科大学)。

(4)【海外における実態調査】①連合王国(University of East Anglia, Sainsbury Centre for Visual Arts, University of Cambridge, British Museum)における実態調査、②ブラジル連邦共和国のエミリオゲルヂ博物館(パラ州ベレン市)およびサンパウロ大学考古学民族学博物館(サンパウロ市)ならびに先史文化とアートに関連する常設展示および展覧会等の実態調査。

(5)【その他の関連活動】①「縄文コンテンポラリー」展出品者を中心に、アーティストの制作活動と先史文化との関係についての調査。②インターネット等を利用して、実態調査のフォローアップを中心に、本研究に関連する新規情報を継続的に収集しデータベースを構築した。③連合王国の University of East Anglia のセミナーにおいて、「先史文化をアートとして受け継ぐ試み」について日本とブラジルの事例を比較した報告を行い、同大学研究者および学生とディスカッションを行った。④第 16 回縄文コンテンポラリー展の一環として基調講演『現代・アート・縄文』を行ったほか、第 14 回ならびに第 15 回の展覧会カタログ掲載用に同展覧会のレヴューを執筆した。

４．研究成果

(1)【定点観測的国内調査の成果】船橋飛ノ台史跡公園博物館で 2001 年から毎年開催されている「縄文コンテンポラリーアート展」は、縄文文化と現代アートを関連させた類似の展覧会(『〔火焔土器的こころ〕ジョウモネスク・ジャパン』、新潟県立歴史博物館、2000;『縄文と現代―二つの時代をつなぐ「かたち」と「こころ」』、2006、青森県立美術館、等)と比較して、まず継続性という点で特筆されるが、殊更に先史遺物と類似した現代アート作品を展示したりするのではない独自の展示方針の点でも注目に値する。本研究期間中の変遷としては、2014 年に、「コンテンポラリーアート」という名称が限定的すぎるという理由から「縄文コンテンポラリー展」へと名称変更した上で、「ビデオフィードバック」映像と縄文文様との類似性の主題化などを通じて、科学とアートという新しい視点を導入した。これは現代アートに基づいて縄文土器製作のプロセスについての新しい解釈を提示している点で、新しい展開であった。2015 年には北米先住民の現代アート作品を展示し、日本列島からカムチャッカを経て北米へとつながる、現代とそして過去の造形表現の「環」を浮かび上がらせることが試みられた。2016 年には「わたしたちのみなもと」というテーマの下に、地元の障碍者アーティストの作品および(同館の展示物についての美術科学習を経て制作された)中学生たちの作品を合わせて展示することで、それらと縄文土器に通底する「みなもと」を鑑賞者に感じさせることが試みられた。このように、毎年テーマを変えることによって多面的な切り込みが可能になっており、縄文文化と現代アートの関係を「岡本太郎的な紋切り型」に押し込めない野心的な企画が、往々にして単発的なものにとどまる他地域の類似の試みと比較しても注目される。なお同展については、メーリングリスト上での開催準備作業を継続的にモニターすることによって、展覧会を企画段階から深く把握することができた。

(2)【国内各地における実態調査の成果】国内 23 ヵ所の縄文遺跡および博物館等の関連施設における実態調査によって、先史文

化に対する自治体や住民の関心や取組みの内容や強度が地域によって著しく多様であることが確認できたと同時に、各地域において、それぞれ「自慢にできる」遺跡や遺物の性格の違いを反映して、取組みにも独自性があることが明らかになった。(例えば、国宝遺物を擁する地域と、特別史跡に指定される遺跡が位置する地域とでは、活用の形態にも相応の違いが出て来る。)先史遺物の展示活動と現代アートの相互作用という面に関しては、単発の特別展でならば、先史遺物を現代アート作品と並んで展示するといった実験的試みがなされることがあっても、常設展等の通常活動においては、先史考古学が現代アートと本質的な関わりを維持し続けるには、なお障壁がある。そうした困難さの理由としては、経費不足など実際的な問題も無視できないが、それ以上に、先史文化の展示施設と現代アートの展示施設との間に（相互不可侵の）制度的分業が確立されてしまっていることが大きい。他方、考古学展示がなされる施設や設備については、予想以上にモダンかつ洗練されたものであることが多く、先史遺物の陳列展示方法においても芸術的価値にも配慮した見せ方（照明法など）が主流となりつつという意味では、考古学展示と美術品展示の間の隔たりが狭まりつつある。しかしそれはあくまでも展示のスタイルにおける接近であって、現代アート制作という活動は、考古学博物館にとっては、縁遠いものでありつづけている。考古学にとってモノとは、すでに死んだ人間が製作した遺物であって、まだ生きている人間が制作する作品ではないということだろう。他方、アーティストの側から見れば、多くの場合、先史文化の遺跡や遺物から作品制作のためのアイデアを受け取ることはあっても、作品を通じて働きかける相手ではなく、総じて、双方向的な関係は弱いというのが現状である。

(3)【海外における実態調査の成果】①連合王国では、先史文化展示とアートの関係に関して対照的事例の比較ができた。2010年に Unearthed 展という、先史時代の土偶や小像を現代の人形等と並置する実験的な展覧会を開催した Sainsbury Centre for Visual Arts も、常設展では、先史遺物を含む品々が、最小限の説明を付されて美術品として陳列されており、Unearthed 展の先駆性が常態化しているわけではない。British Museum では、展示品が歴史的価値と芸術的価値を兼ね備えた至宝であることが強調されており、それは、作家名と不可分に結びついた近現代アート、そしてそれを展示する美術館の世界とは隔絶している。University of Cambridge の考古学人類学博物館の古色蒼然とした展示は、芸術的価値から独立した科学的証拠品としての価値基準に基づいており、現代であると否とを問わずアートの展示空間とは、截然と隔たっている。これらの事例から逆説的に明らかになるのは、先史文化と現代アートが通常あまりに隔絶しているがゆえに、それを遭遇させたときに開放されうるエネルギーの大きさである。現代アート作品（とその製作）とは、先史文化研究にとって、取扱いに注意を要する危険物なのであろう。②ブラジルでは、先史文化を現代アートと関係づける試みは、現代社会における先住民の存在という因子によって屈折を被ることを余儀なくされ、そこでは、先史文化と現代の先住民のあいだの「断絶の言説」と「連続の言説」がせめぎあう。こうしたブラジルの状況と対比して浮び上がるのは、「私たち日本人の祖先である縄文人が遺した文化」という言説である。ほぼ全ての調査対象施設の展示において、「現代日本人と縄文文化の連続性」は、敢えて検討する必要もない暗黙の前提とされており、この論点については今後考察を深めたい。

(4)【研究成果の総括】

①「現代アートを用いての先史文化理解」という認知考古学的アプローチは、まだ日本の考古学界では広く受け入れられているとは言い難く、特に埋蔵文化財センターや博物館等の遺物の保存・展示を主務とする現場では、現代アートが考古学研究に貢献しうる可能性についての認識は総じて乏しい。とはいえ、博物館を舞台にアート作品を展示するようなプロジェクトが、それに実際に携わった考古学関係者たちにもたらした意識変化は小さくないようであり、今後さまざま試みが積み重ねられ、アーティストに対する「警戒心」も徐々に弱まっていくなかで、生産的な相互作用が生まれて来ることが期待できる。

②「先史文化を用いての現代アート制作」に関して、非常に多様な試みが実際に行われており、「土偶キャラクターの考案」や「土偶の文様をデザイン化した商品開発」等の活動にみられるように、先史文化を用いてのアート制作の裾野は広がりつつある。とはいえ、現代アーティストによる創作活動に絞れば、先史遺物とデザイン的に類似していたり、漠然と先史文化風の作品を制作したり、遺跡に現代アートを配置したりするタイプの作品が多数派であることも確かである。しかし他方で、先史文化との深いレベルでの対話をオリジナルなアート作品へと昇華させているアーティストが、少なからず存在し、そこには、考古学に寄与しうる貴重なアイデアが含まれてもいる。

③「現代社会における先史文化にとっての現代アート」という、本研究の中心をなす問いに対しては、つぎのような暫定的な結論が得られた。近代においては、先史遺跡や先史遺物の意味づけを考古学が独占し、先史遺物の一部を美術史学が美術品として認定するという分業システムが成立していた。それに対して、現代アートが予期せぬ方向から揺さぶりをかけ始めている中で、「地殻変動」が生じ、先史文化や遺物が「さまざまなかたちの利用」に開かれつつあることが、多地点を比較対照しつつ実施された今回の文化人類学的実態調査によって明らかになった。今後の課題としては、アートへの注目は維持しつつ、それと直接に結びつくものだけに限定せず、「先史文化の現代的利用」について、各地の取組みについて、より広くより詳細に明らかにすると同時に、それを「過去を文化的に受け継ぐことの意味」という、より根本的な人類学の問いへと展開していくことを計画している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

１．古谷嘉章、「イノチを生む動く線とリクツが生む複雑な形」、『縄文の手・現代の手』、査読無、2014、pp.4-6.

２．Yoshiaki FURUYA, Moving Lines engender Life / Complicated Forms are generated by Logic. *Jomon works, Contemporary works*, 査読無、2014、pp.7-10

〔学会発表〕（計１件）

１．Yoshiaki FURUYA Inheriting the Prehistoric Past, Artistically: Two Case Studies, IUAES 2014, International Conference Hall of Makuhari Messe, Japan.

〔図書〕（計１件）

１．古谷嘉章ほか、同成社、『「物質性」の人類学』、2017、pp.3-32, pp.205-236

〔その他〕

１．古谷嘉章『現代・アート・縄文』（船橋市飛ノ台史跡公園博物館における第 16 回縄文コンテンポラリー展、招待講演）2016.9.4

６．研究組織

(1)研究代表者

古谷嘉章（FURUYA YOSHIAKI）

九州大学・大学院比較社会文化研究院・教授

研究者番号：50183934